

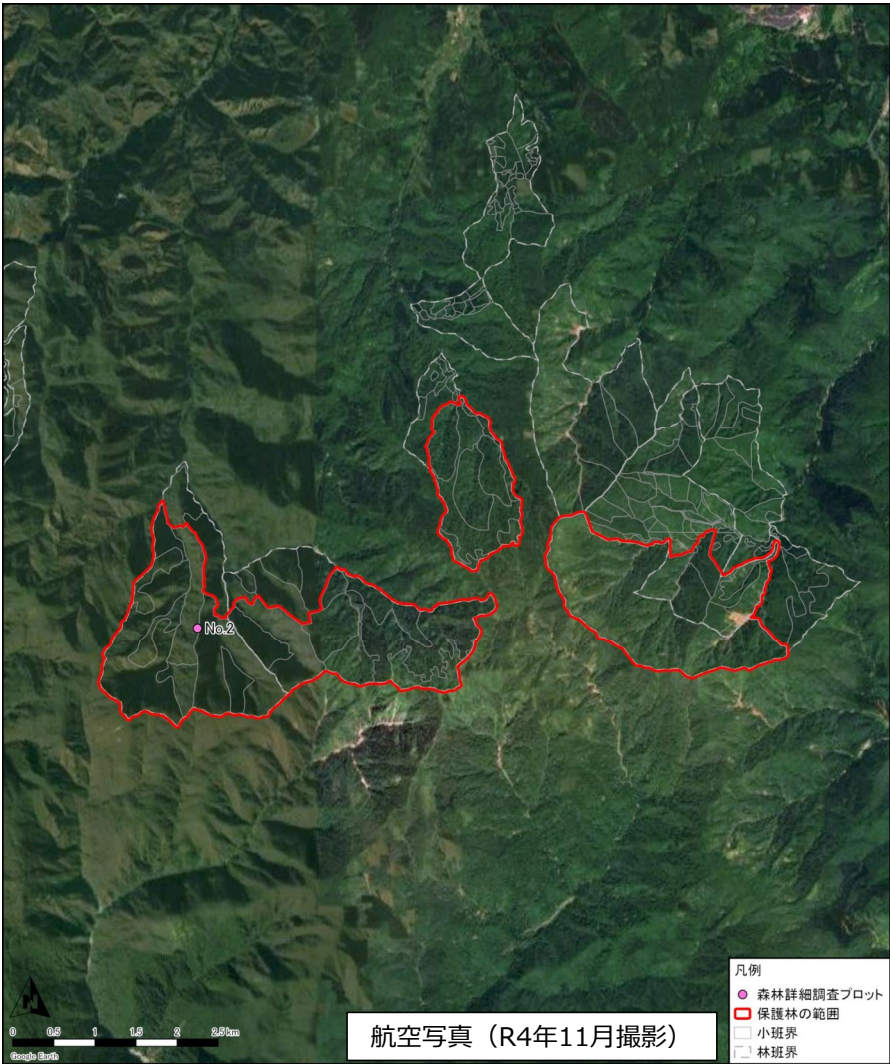
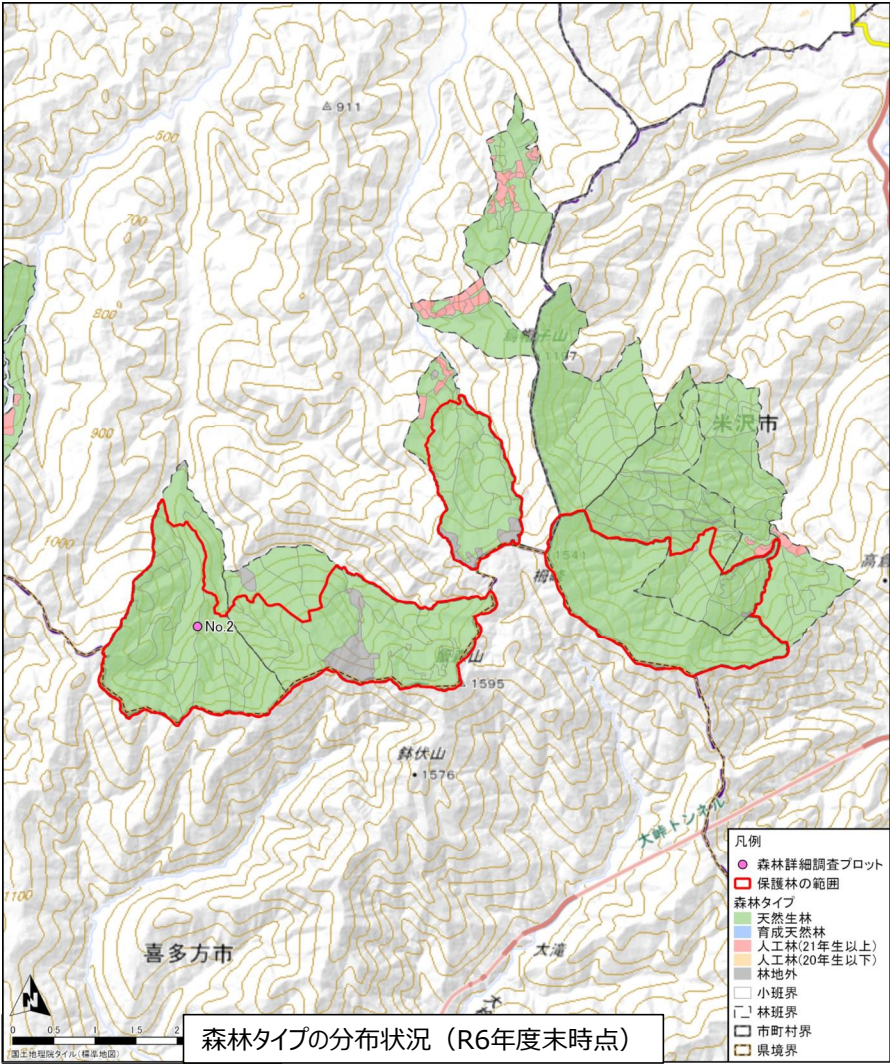
つがみね いいもりやま
杣峰・飯森山生物群集保護林

面積	計： 1,043.30ha （置賜森林管理署）
設定目的 （管理方針書より抜粋）	<u>原生的なブナ天然林のほか、杣峰には、気候的極相として分布限界(西端)のオオシラビソ林が分布している。ブナ林は、急峻地形に相応してリョウブ、タムシバなどを伴う退化型を示している。杣峰のオオシラビソ林は、吾妻山とは異なり、ヒノキアスナロやコメツガの混成を欠く疎生型タイプである。</u>このほかに、キタゴヨウーネズコ、ヒメヤシャブシータニウツギ、チシマザサ群落等が展開する。 このような多様な植物群落を一体のものとして保存することを目的とする。
前回調査の評価・課題等	保護林設置目的であるブナ天然林とオオシラビソ林の保護に資するための森林が維持されている。
モニタリングの実施間隔	10年

デザイン

原生的なブナ天然林のほか、梶峰には、気候的極相として分布限界(西端)のオオシラビソ林が分布している。ブナ林は、急峻地形に相応してリョウブ、タムシバなどを伴う退化型を示している。梶峰のオオシラビソ林は、吾妻山とは異なり、ヒノキアスナロやコメツガの混成を欠く疎生型タイプである。

本保護林内及び周辺の森林タイプの分布に変化は確認されなかった。

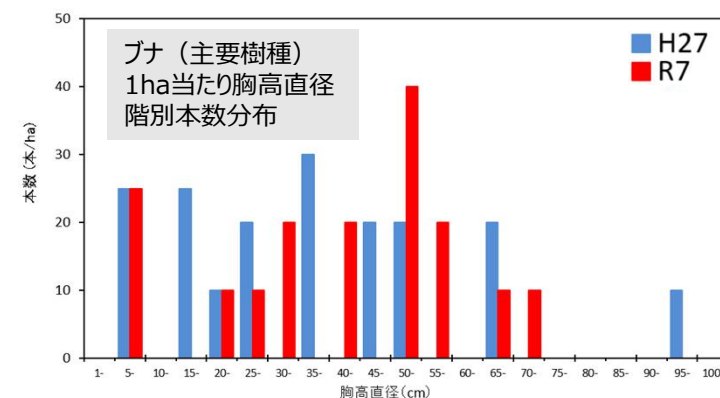
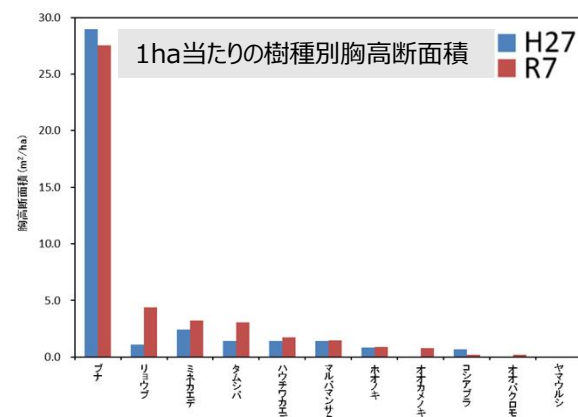


【プロットNo.2】

	H27(10月1日)	R7(8月19日)	比較結果等
磁北方向			大きな変化はない。 (手前のブナに幹割れ発生)
磁東方向			大きな変化はない。
磁南方向			大きな変化はない。
磁西方向			大きな変化はない。
天頂			大きな変化はない。

樹種	平均胸高直径(cm)		胸高断面積(m ² /ha)		胸高断面積割合	
	H27	R7	H27	R7	H27	R7
ブナ	38.6	41.9	28.96	27.55	75.6%	63.3%
リョウブ	5.9	2.7	1.10	4.40	2.9%	10.1%
ミネカエデ	7.6	3.1	2.44	3.22	6.4%	7.4%
タムシバ	7.7	3.9	1.44	3.04	3.8%	7.0%
ハウチワカエデ	11.7	11.7	1.42	1.75	3.7%	4.0%
マルバマンサク	7.1	4.2	1.41	1.49	3.7%	3.4%
ホオノキ	32.4	33.5	0.82	0.88	2.2%	2.0%
オオカメノキ		2.3		0.80		1.8%
コシアブラ	11.1	2.9	0.69	0.22	1.8%	0.5%
オオバクロモジ		2.2		0.19		0.4%
ヤマウルシ		1.1		0.01		0.0%
11種			38.29	43.55	100.0%	100.0%

※緑セルは主要樹種を示す。

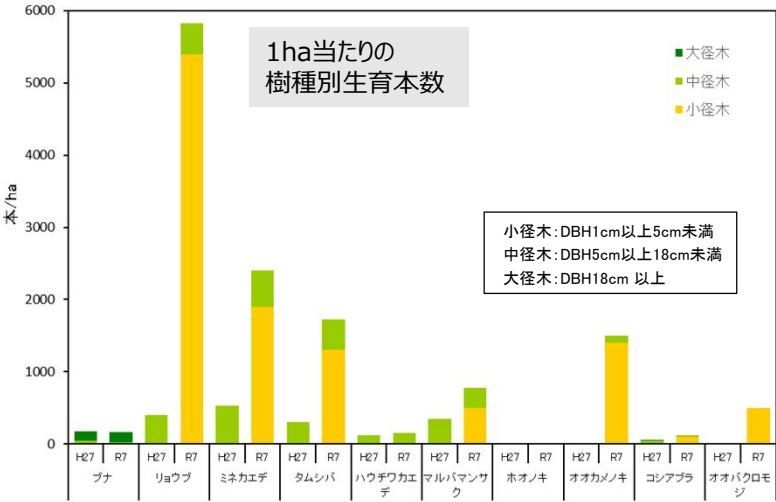


- ・主要樹種であるブナの胸高直径階は進階が見られるものの胸高断面積は微減した。（胸高直径95cm程度の個体の倒伏を確認）
- ・ブナは大径木の割合が高く、倒木も発生していることから、この林分は成熟段階から老齢段階に推移しているものと考えられる。

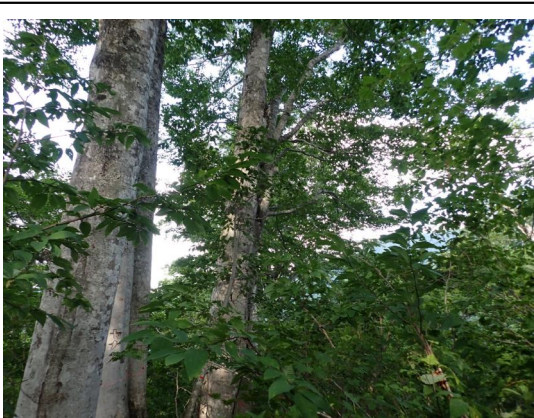
デザイン
 森林詳細調査
 【プロットNo.2】

樹種	生育本数(本/ha)		本数割合	
	H27	R7	H27	R7
ブナ	180	165	9.2%	1.2%
リョウブ	400	5825	20.5%	43.9%
ミネカエデ	525	2400	26.9%	18.1%
タムシバ	300	1725	15.4%	13.0%
ハウチワカエデ	125	150	6.4%	1.1%
マルバマンサク	350	775	17.9%	5.8%
ホオノキ	10	10	0.5%	0.1%
オオカメノキ		1500		11.3%
コシアブラ	60	125	3.1%	0.9%
オオバクロモジ		500		3.8%
ヤマウルシ		100		0.8%
11種	1950	13275	100.0%	100.0%

※緑セルは主要樹種を示す。



- ・ブナは大径木の割合が高く、小径木は確認されなかった。
- ・リョウブ、ミネカエデ、タムシバ等の小径木が多数確認された（調査手法の変更により、1 cm以上の小径木が計測対象となったため本数が大幅に増加）。



調査地の外観（プロット2）



調査地の外観（プロット2）

デザインに関する評価

基準	指標	結果
地域固有の生物群集を有する森林が維持されている	自然状態が十分保存された天然林等の構成状況	森林タイプの分布に大きな変化は確認されなかった。 大径の個体が占める割合が高く、胸高直径95cm程度の個体が倒伏するなど、成熟段階から老齢段階へと推移していると考えられる。

価値
 森林詳細調査 下層植生調査結果

【プロットNo.2】

年度	H27	R7			
調査区	プロット全体	N区	S区		
低木層の植被率(%)	80	50	60		
低木層の優占種	リョウブ	リョウブ	リョウブ		
草本層の植被率(%)	50	70	70		
草本層の優占種	オオイワウチフ	オオイワウチフ	オオイワウチフ		

出現種数	28	10	12	環境省RL	山形県RL
アケシバ	○	○			
ウラジロヨウラク	○				
エゾユズリハ	○				
オオイワウチフ	○	○	○		
オオカメノキ	○	○	○		
オオバクロモジ	○		○		
コシアブラ	○				
コハウチワカエデ	○				
シシガシラ	○				
シノブカグマ	○		○		
タムシバ	○	○	○		
チシマザサ	○	○			
ツクバネソウ	○		○		
ツルアリドオシ	○		○		
ツルシキミ	○				
ハイイヌツゲ	○				
ハウチワカエデ	○	○			
ハナヒリノキ	○				
ヒメモチ			○		
フナ	○	○	○		
ホオノキ	○				
ホトツジ	○	○			
マタビ	○				
マルバマンサク	○		○		
ミネカエデ	○	○	○		
ムラサキヤシオツツジ	○				
ヤマウルシ	○				
ヤマソテツ	○				
リョウブ	○	○	○		

- ・下層植生の生育状況に目立った変化は見られなかった。
- ・ブナの稚樹や実生が確認された（H27、H30は豊作、R4は並作）。
- ・絶滅危惧種等の重要種は確認されなかった。



プロット2（N区）



プロット2（S区）

病虫・鳥獣・気象害の発生状況

項目	結果
病虫害	記録なし
鳥獣害	到達経路上でアカソにニホンジカのものと思われる食痕を確認
気象害	記録なし

価値に関する評価

基準	指標	結果
森林生態系からなる自然環境の維持、野生生物の保護、遺伝資源の保護が図られている	野生生物の生育・生息状況、森林の被害状況	下層植生の生育状況に目立った変化は確認されなかった
		外来種は確認されなかった
		森林被害は確認されなかった

梶峰・飯森山生物群集保護林

実施した調査	資料調査、森林概況調査、森林詳細調査(1箇所)
--------	-------------------------

利活用

- ・1件の学術論文等が確認された。
- ・空中写真判読による飯豊山東部地域の全層雪崩と雪崩地形（秋山ほか、2025）

利活用に関する評価

基準	指標	結果
森林施業・管理技術の発展、学術の研究等に利用されている	学術研究での利用	雪崩地形に関する学術研究等への利用が1件確認された。

管理体制

- ・置賜森林管理署：令和4年の豪雨災害により湯の沢林道が被災しているが、手前の町道も被災しているため国有林側の災害復旧工事も手つかずの状態である。被災前は林野巡視等を行っており、林道復旧後には巡視を引き続き行う予定である。境界巡視も通常業務で実施している。
- ・山形県置賜総合支庁：巡視等は実施していない。

管理体制に関する評価

基準	指標	結果
適切な管理体制が整備されている	保護林における事業・取組実績、巡視状況等	十分な管理体制が取られている。

総括表【プロット2】

調査年度		H27	R7
調査日		2015/10/1	2025/8/19
プロット情報	斜面方位、傾斜(平均)	N50° E、16°	
	局所地形	平坦尾根	
林分状況	段階	成熟	成熟
	【高木層】主要構成樹種	ブナ	ブナ
	【高木層】植被率	70%	70%
	【高木層】樹高	8～25m	15～27m
	【高木層】DBH	25～98cm	25～70cm
	【草本層】優占種	オオイワウチワ	オオイワウチワ
	【草本層】植被率	50%	70%
林分等の状況		高木層を形成するブナは、おおそ胸高直径30～100cmであり、下層にはブナの稚樹が見られ、良好な状態が保たれている。低木層に見られる種は積雪により、斜上となっているものがほとんどである。	高木層を形成するブナは胸高直径50～70cm程度の大径の割合が高く、前回調査時の100cm近い個体は倒伏した。成熟段階から老齢段階へ推移していると考えられる。亜高木層から低木層では積雪により斜立したリョウブ等が密生する。林相に大きな変化はなく、おおむね健全な状況が確認された。
林況写真			

現地調査結果総括・考察【プロット2】

- ・ブナが林冠を構成し、胸高直径50～55cm階の個体が最多で、65～75cm階も確認された。
- ・下層にはブナの実生が見られて良好な状態が保たれている。
- ・亜高木層から低木層はリョウブ、ミネカエデ、ハウチワカエデ等が見られるが、ヤブ状に密生し、積雪の影響により大半の個体が斜立や根曲りを呈した樹形となっている。
- ・ブナの胸高断面積は微減した（胸高直径95cm程度の個体が倒伏したことに起因する）。
- ・大径の個体の割合が高く、倒木も発生していることから、この林分は成熟段階から老齢段階に推移しているものと考えられる。
- ・ブナは小径木がなかったものの稚樹や実生が多く見られ、今後も更新が期待できる。
- ・森林タイプの分布状況の変化や病虫害・鳥獣害・気象害は特に確認されず、本保護林は全体として安定して維持されていると考えられる。
- ・到達経路上でニホンジカのもと思われる食痕が確認されたため、今後の注視が必要である。

全体まとめ

- ・林相に大きな変化はなく、安定して維持されていることが確認された。
- ・課題については特段確認されなかった。

評価を踏まえた今後の対応等

項目	結果・対応等
今回の評価を踏まえた 今後の対応について	・定期的な巡視を継続 ・10年後にモニタリングを実施
保護・管理及び利用に関する事項 (保護林管理方針書)	原則として自然の推移にゆだねることを基本とし、施業等を必要とする場合には、管理経営の指針に基づき行うこととする。 ※現行どおりとする。